

## 6-b カタログ

カタログというのは、それを補完する仕様書などと併せて、一般の方々が普通に目にするのでできる唯一の「公式」印刷物ということになるでしょう。もちろん、実質的に同様なものを、後述するインターネット経由でダウンロードできるようにしているビルダーやディーラーも存在しますが、コンピュータやインターネットに接続するための回線を持たなくとも、それを手にして見るのでできるカタログは、今も販売促進のための主要媒体となっています。

\*

多くのカタログは、そのフネのイメージの訴求にかなりの部分を費やしています。そのフネを楽しむための理想的なシチュエーションを大判の写真で見せ、さらに印象的なフレーズの文言をキャッチコピーとして並べて、いかにそのフネが素晴らしいかをアピールします。

ただ、抽象的な美辞麗句がそのフネの実体を把握するのにさして役立つものでないことは、おそらくビルダーやディーラーの方々も、さらにはその種のカタログを製作している会社も、場合によってはその文言を考え出したコピーライター自身も、承知しているであろうという気がします。しかし、こういった言葉がなくなる様子はありません。

もしかすると、「これはいったい何を言いたいのだろう？」というかたちで興味を持たせるための要素、ということかもしれません。

\*

カタログに掲載されている大判の写真は、そのフネのディテールを把握する役に立ちます。ただ、ビルダーやディーラーがそのフネの特徴として見せたい部分というのは、おそらく、ほかのページにクローズアップの写真が掲載されているはずですから、そういう部分はそちらでじっくり見ればいいわけで、大判の写真ではそれ以外のところを観察するのが、おそらく正解です。

また、そのフネを楽しむシチュエーションカットとして、ひとり、あるいは数人の人物が乗艇している写真があるかもし

れません。こういった写真では、人間を尺度の基準として、スペックとしては表れない、フネ各部の寸法把握に利用することができるでしょう。もちろんこれは、写真に写っている人物が特別に大柄であったり小柄であったりはしない、という前提が必要ではあります。

\*

カタログには、スペック以外にも、フネの特徴に関する数値が記されていたり、大きい、広い、高いといったかたちで、そのフネの寸法上の優位性について記されていたりすることがあります。

しかし、そういったものは、何が基準か分からないと、なかなか見る人には理解できないことでし、仮に「当社比」で「従来の〇〇よりも30%広い」とされていても、その「〇〇」そのものが狭いのか広いのか分かりませんから、そのままでは分からないのです。唯一、その〇〇を知っている人だけが、その意味を理解できる表現です。

具体的な数値を上げて「××リットルの大容量」というような表現があったとしても、実際にその「××リットル」が何と比べて大容量なのか、それが記されていない限り、これも理解しにくい表現ということになります。確かなのば「××リットル」という容量だけです。これを「××リットルというのは、その造作としては大容量に類するサイズなのだ」と受け取ってはいけません。

結局、そのモノの大小や高低、広狭などは、あきらかに基準になるものがないと分かりにくいものなのです。

ただし、人間の寸法が基準になるものは、誰にでも分かる部分です。たとえばキャビンの天井高が1.9mとしてあれば、これはよほど大柄な人物でない限り、まず立って過ごせるということが理解できるでしょうし、長さ1.3mのバースと記されていたら、これはもうバースとは名ばかりで、普通の大人は横になれないと分かります。

\*

スペック関係や装備品、搭載エンジンなどについては基本的に客観的なデ



ータですし、妙な表現があると法的な問題になる可能性のあるところですが、この部分については、他モデルと大いにその数値を比較して検討したいところですが、実のところ、全長や全幅に関しては少々微妙な部分もあります。

「2-a 数値の意味」でも触れているように、全長として記されている値はフネの形状や付属物によって異なっていたりしますし、全幅にしても、そのフネの平面形によって、フネのどの部分が測られるのか異なります。それらの値の違いが、そのままハルのボリュームの違いというわけではなかったりするので。

とはいえ、一般的に入手可能なフネのスペックはカタログに記されたものだから、それがフネのどの部分を、どうやって計測しているかは、きちんと理解しておく必要があります。

\*

カタログというのは、あくまでもそのフネを売るための道具のひとつとして作製されるものです。客観データばかりが掲載されているわけではありません。それはあらかじめ理解しておくべき事柄でしょう。ただし、そのフネのオーナーとなり、それを楽しんでいる自分の姿や、家族や仲間との時間を想像するためには、最適な素材でもあります。

カタログは、楽しむものなのです。